
平等に差別される世界で

東波 広

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平等に差別される世界で

【Nコード】

N 6 1 3 7 X

【作者名】

東波 広

【あらすじ】

主人公がたくさん出てきます、はい。初めの話の人物が一応主軸の主人公なのですが、しばらく出てこないでしょう。第一章は異世界転生主人公です。

全ての始まり（前書き）

作者はたびたびスランプに陥ります、ご注意ください

主人公がころころ変わります、ご注意ください

ほぼ完璧オリジナル小説です、見切り発車なうえ創作苦手（なんで書いたし）なのでたびたび止まります

数年単位で書く可能性しかないので、待てない方はご遠慮ください
なお、ほぼ完璧に構想だけでスタートしたので主人公像すら決まっております

「なんとかなるよ!」がモットーです、よろしく

全ての始まり

世界でただ一人、「異能」と呼ばれる力を持つ僕

この世にはありえない現象を起こすことのできる力

昔はたくさんの人たちがこの力を使えたらしい

超能力
ESPや魔術・魔法、小さな物で言えば強力な第六感などのことを
総じて「異能」という

科学が発展し、隠さなければならなくなった力

科学の便利さにより新たな「異能」も必要なくなった

新たな力は生まれず、力を持つ者は影に生き脈々とその力を受け継
いできた

僕はその力を持つ最後の者だ
異能

影の住人は皆寿命や迫害により消え、最後の子となった僕に全ての
「異能」が与えられた

僕はこの力で調べた、まだ僕と同じような者が残っていないかと

僕はこの力を憎んだ、孤独になるための力などいらないと

それから数年ほど経った時、僕は思いついたんだ

この世界を壊し、新たな理を生み出そうと^{ことわり}

全ての者達に平等に、しかし差別的^{ランダム}に

各人が一つの「異能」の力を持ち、この世界の理を捻じ曲げればと

僕は新しい世界を創造した

もちろん僕は記憶を持ってその世界の一人となる

これから数百年後にわたり、その世界は続いた

全ての始まり（後書き）

- 近況 -

10月よりスランプ脱出、書き始めました
なんとか・・・なるといいなあ・・・

過去の記憶（前書き）

作者はたびたびスランプに陥ります、ご注意ください
主人公がころころ変わります、ご注意ください

過去の記憶

家は首都の暗い路地裏に異次元空間を発生させ建っている。

『異能』の力を持たない者は見えないようになっていし、入ろうとすれば神隠し山奥へとはなれるにあう。

『異能』の力を持つ者は既に僕を含めて四人だけとなっていた。

「母さん、シア姉。帰ったよ・・・」

気が重い僕は家に帰ると、母親と姉に声をかける。母さんは振り返ると姉の手に持った黒猫に視線を送る。姉は”それ”を生き返らせようと必死だった。

「なんで！なんでよ!？」

”それ”は僕らの父、アルバード・ウエリアスの獣化した姿であつた。

体はぐつたりとしており、生気がない。姉は自身の持つ治癒能力を”それ”に使い続けている。

母さんは悲しそうな目をしているが、もとより覚悟があつたようで絶望の表情はしていない。

「ねえ、シユー・・・」

いつの間にか治癒を放棄し僕を見つめている紅い瞳。銀色の髪によりさらに強調されて強く光る。

「貴方のあの能力で治せるんでしょう？早く・・・」
動けない、動かない。

「さあ、早く治して・・・」

確かに、治せた……。せめて死んでしまふ前なら。

「早く！」

姉からスツと視線を外すと母さんに向き直る。

「母さん、ごめん」

そつとぬくもりが頭を覆う。しっかりと抱きしめられた中でも僕は泣けなかった。

僕と父親の仲は悪い。もうとてつもなく悪い。顔を見せれば殴り合い、名前が出れば吐き気を催す。

なぜかと聞かれると虐待されたからと答えるしかない。

父は姉を愛し、母は僕を愛した。父はそれが気に入らなかったのだろう、三歳より僕は虐待を受けていた。

それが終わったのは七歳の頃、僕の力が発現して父親が傷を負った。父親は暴力を振るうことはなくなったが、僕は家を追い出された。母さんに。

二人が殴りあいになったことが原因だ。双方とも大怪我を負い、姉に治された。

母さんは僕を守った、遠ざけるという選択で。

僕は父親が嫌いで、姉も嫌いだった。代わりに母さんに愛情を求め、注いだ。

十歳になったある日、母さんから手紙が届いた。

『アルが死にそうなの、助けて』

ただそれだけで、僕は迷った。迷いに迷い、やっと決心したのが今日。母さんの願いだからと自分に言い聞かせ家に帰った。

父親は『異能の使いすぎ』によって獣化しすぎたツケが回ってきたのだろっ、体が耐え切れなかった。

姉の治癒により生きながらえていたのだろっ、僕が帰る数時間前には生きていたらしい。

「貴方のせいで死んだのよ」

「もう少し早く来れば」

「クズ」

姉はそんな言葉をかけ、父親が死んだ翌日には息を引き取った。

母親は家族を二人失ったことで心が壊れた、もう治らないほどに。手は尽くした、だけど”時間の流れは変えることができなかった”。

でも僕は母さんがいればそれでよかった、生きてさえくれればそれでよかった。

だけど・・・

母さんは死んだ、首を吊って。

絶望が僕を襲う、そばにいてくれた者はもういない。

悲しみが僕を襲う、抱きしめてくれた者はもういない。

そんな僕に・・・母さんが死んだことである異能が発現した。

もともとの僕の能力は『生者の時間を巻き戻す』こと、そして『時間の波』で攻撃すること。

新しい異能は『理を生み出す力』。

だから僕は・・・自身の時間を・・・巻き戻した。

過去の記憶（後書き）

- 近況 -

前話と同日投稿により省略

生まれた世界（前書き）

作者はたびたびスランプに陥ります、ご注意ください
主人公がころころ変わります、ご注意ください

生まれた世界

自身の時間をまき戻した場合どうなるか？

理の力を持たない状態で時間をもどってしまい、記憶を忘れる。

（『理を生み出す力』さえあれば時の流れを変えられたのに・・・！）

僕はもう一度同じ運命を辿ってきた。

父親が死に、姉も息を引き取り、母さんは自殺した。

そして理を使った時間に戻り・・・記憶の逆流が僕を襲う。

「ぐあああああ！！」

まったく同じこととはいえ、一つの人生を頭に入れるのはつらい。

（確かに過去を変えてしまえば頭は耐え切れないよなあ・・・）と初めて思っ、視界が暗転した。

それから数時間はたっただろうか、母さんが目の前にダランと垂れている。

もう数十年分の期間を過ごした精神は悲しみこそすれ、壊れることはなかった。

それから数年、庭の花壇で食材を取り井戸から水を汲む。

食べて寝る、ただそれだけを続けた。もう年齢も数えていない。

友人と呼ばれる者は出来なかった。親がいない子供、捨てられた子供。そう周りに認識されていた。

話しかけてくれた者は、いた。足を怪我した者の”足の時間を巻き戻したが怯えて去っていく。次の日には魔女狩りよろしく討伐隊が結成されていた。僕はその時より外の世界に出ていない。

（ねえ、僕は何か悪いことをしたのかな？）

（ねえ、僕はこれから何を支えに生きればいいのか？）

（ねえ、僕が受け入れられる世界はどこ？）

そして僕は考えた。

考えて考えて考えて、
考えて考えて考えて、

「そうだ、世界を創ろう」

（僕のように異能を）

（一つだけでいい、どんな力でもいい）

（ただ一つの『異能』を）

（全ての人間に『異能』を、その人”唯一の力”を）

（そうすれば平等で、みんな僕を怖がらない）

（僕のこの力もいらない）

（ただ、僕は心のよりどころが欲しい）

（ああ、この科学も消してしまおう。皆が進歩する世界へ）

「この世界を壊し、新たな世界の理を生み出そう」

そして世界は創りかえられた。

人々は唯一の『異能』を持ち、科学の消えた世界へ。
記憶を忘れ、新たに生み出される命。

人々は忘れた、万能の力を持った科学を。

ところかわり、ここは森の中。

生き物の声と植物の香り。

ここから人は、新たな時代を築いてゆく。

生まれた世界（後書き）

すみません、なんかいきなり矛盾が・・・
気にせずに書きます・・・;;;

- 近況 -

前話と同日投稿により省略

最弱の異能？（前書き）

作者はたびたびスランプに陥ります、ご注意ください
主人公がころころ変わります、ご注意ください

最弱の異能？

朝、まるでアマゾンのような密林で目を覚ます。

俺はいつもの様に夢じゃないことを再確認して藁のような物で作られた寝床を後にする。

「いつ見ても慣れないなあ・・・」

1990年、東京と呼ばれる都市に誕生した俺はすくすくと健やかに育ちそれなりの家庭でそれなりの人生を歩んでいた。

転機が訪れたのは大学2年の夏、俺達「異常現象研究会」（よくもわるくも常識外なことから）通称：異常研と呼ばれるサークルの合宿を行っていた。

テーマは『一部地域での神隠しについて』で、神隠しが頻繁に発生するスポットの調査をしていた。

どっかのバカ会長が周りの制止も聞かず、面白そうだから！と怪しげな石に触れたとたん俺はこの世界に生まれてきた。

いや、頭は良いんだあの人。面白そうなのが第一、楽しいことも第一、自分のために自分の人生を費やす”我が道を往く”典型的なタイプだ。

話がそれたな。

まあそんなわけで転生してきたわけではあるが異常研メンバーはここには住んでいない様だ。

あの人たちなら俺とは違って異常な行動にためらいが無いからいままごろ神童と呼ばれていることだろう。

あれは一歳の頃だっただろうか？

いまだ「おぎゃあ」しか喋らなかつた俺は考え抜いた末、周りの子供達の行動に沿って生きてきた。

この異世界で生きていくための決断だった。

おかげで周りから浮くことも無く、平凡な毎日を送っていた。

「おはよう、かあさん、とうさん」

朝食の用意をしていたとうさんと朝の狩りから戻ってきたらしいかあさんに挨拶をする。

「おはよう、ミコト」

「シャツシャツシャ、今日はドブギが獲れたぞ！喜べ！」

前者はとうさんであり、後者はかあさんだ。

もちろんこの世界での常識は”父親が狩り、母親は家事をする”のであるが、うちはかあさんの方が男らしい。どこに惚れたんだとうさん……。

求婚したのはとうさんだそうだ。かあさんは性格がアレだが容姿はいい。体が目当てで「言い寄る男は居たようだが全部返り討ちにした」と子供の頃武勇伝を語ってくれた。

「とうさん」

「なんだいミコト、不思議そうな顔して。ボクの顔のどこがおかしいかい？」

なんだろう、非常に寒い、冷や汗が止まらない！

「いや、かあさんのどこが好きになったのかなあ……と……」
途端に寒気は消えて、どこか熱っぽい眼差しでかあさんを見るととうさん。なんだろう、とても乙女っぽいぞとうさん。

「まだミコトにはわからないだろう……。そうだな、あと五年くらいしたら教えてやろう」

俺は不思議そうな顔で木でできた小さなテーブルに着く。
おいしそうな朝食の香りに思わず頬を緩める。

まあ、そうだな。だって俺いま十歳だし。

最弱の異能？（後書き）

- ・ 主人公変わりました。早いですね^^；
一応大分構想は固まってきました。ラストの終わり方も・・・
ただ・・・途中が書けない私としましてはいまだ不安が残ります・・・

最弱の異能？その二（前書き）

作者はたびたびスランプに陥ります、ご注意ください
主人公がころころ変わります、ご注意ください

あれ？前話で「最弱の異能？」について書くはずが父母の話に・・・

最弱の異能？その二

突然だがこの世界の話をしよう。

この世界、なんと魔法や超能力が使えるファンタジー世界なのだ！
どうだ、驚いただろう。

それらはまとめて『異能』と呼ばれている。

俺が観察した普通の子供の教育課程を見ていくところなる。

【言語能力が身についてくる】

〇歳～一歳

【各家庭で健やかに育てられる】

一歳～六歳

【小学校のようなところで勉強する】

六歳～十歳

【各異能を伸ばすための訓練をする】

十歳～十二歳

【就職先を探し、職場体験をする】

十二歳～十五歳

【成人し、異能などを使い給料を貰う】

十五歳～

俺は現在小学校に通っている。

正確には今日までののだが、いまはまだ学生という身分だろう。

十歳になると王城で診断を受けて自身の『異能』を知り、能力を伸ばしてそれに合った就職をするというものだ。

実はひそかに楽しみにしており、そして恐れていた。

「とうさん、かあさん。行ってくるよ」

ドブギ（猪風のブタ）の冷シャブとサラダを食べた後、学校へ行く準備を終えてとうさんとかあさんに出かける旨を伝える。

「ああ、いつてらっしゃい。楽しみにしてるよ」

「おう、いつてこい。どんな『異能』か楽しみにしてるぜ」

何度も言っがとうさんが前者、母さんが後者である。

木造の小さな小屋を出て歩いていくと村のど真ん中にある小学校に着く。学年ごとに分けられた教室に向かう。

「おはよ」

俺は挨拶もそこそこに自分の席へ向かうと教室を眺める。

皆一様にはしゃいでいて、少し楽しい気分になってくるのが不思議だ。

「おはようございます、皆さん」

例の黒板消しトラップに今日も嵌った先生（独身女性）は、黒板消しを頭に載せたまま無表情で挨拶をする。

「これから王城に向かいますが、欠席者は」

教室を見回し、クラス長に確認を取る。

「いないようですね。では向かいますので一列に並んで校舎を出ましょう」

俺達は避難訓練のように統率された動きで校舎出る。

皆、思い思いに頭を下げたり涙を目じりにためていたり、果ては両手を組み拜んでいるやつまで居る。

「また帰ってくるのだから後にしなさい」

先生は軽く注意すると初めて微笑んで先導する。

もちろん男子生徒数名は惚けたように数秒間その場を動けなかった。

三時間ほどかけて歩いて行くと、王都と呼ばれる街が見えてきた。
移動中は先生が『青い炎』で魔物を撃退してくれた。強すぎる。

王都に着いた学生一行は王城の庭に座っていた。
他の学校の生徒もいるため、数百人はいるはずだ。庭が埋まらない
ことに恐怖を感じる・・・。

「では！これより『異能』を発表する！」

騎士団、それも高い身分だろう人物が壇上で叫んでいる。

「呼ばれた者は前へ出て来なさい。異能名を発表し、発表された者は
右手のローブの男達から使い方を学ぶように！」

学生は一斉にローブの男達を見る。何年もやっているだろう男は動
じず、今年からだろう男は微妙に笑顔が引き攣っている。

「一番！アリカ・ウィールズ」

「はい！」

呼ばれた女の子は壇上に上がり異能の発表を受ける。

「汝、『戦乙女ヴァルキリー』として困難に立ち向かうべし！」

「！？はい！」

予想外だったのか、少し戸惑ったようにも見えたが、元気良く返事

をすると右手に向かう。

それ、ジヨブ名じゃ・・・とはさすがに言えない俺は黙っていた。

「十五番！オガ・オールド」

「はい」

呼ばれた男の子はよく知る名前で、この世界に巻き込んだ張本人だった。つまり異常研会長である。

「汝、『真理』として真実の究明をするべし！」

「はい」

まったく感情の籠ってない目で生徒を見渡すと、右手に去っていった。

去り際にニヤリとした笑いを浮かべていたのが気になる。

「八十四番！ミコト・アールレイ」

「はい」

前へ出て壇上に上がる。

「汝、『運』として、頑張れ！」

「え！？何もなし？」

子供達が笑い声を上げる。ちくしょう。

「これは私にもわからん」

「はあ」

俺は逃げるように壇上からそそくさと降りるとロープの男達の方へ歩いていった。

最弱の異能？その二（後書き）

若干無理やりです

設定混ぜると読みにくくなりますね、多分。

ということだ『運』でした。次回能力公開します。

- 近況 -

前話と同日です。

3日更新で安定でしょうか。ではまた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6137x/>

平等に差別される世界で

2011年10月19日01時01分発行